



金城学院大学生生活環境学部
(旧家政学部：家政学科、生活経営学科)
同窓会会報第5号
発行：2006年9月1日
〒461-0011 名古屋市東区白壁4-64
みどり野会館内



「Don't Worry！」

理事長・学院長 戸田 安土

「山路きて なにやらゆかし すみれ草」

「野のはな」という言葉を聞くたびに、真っ先に私の脳裡をよぎるのは、この句にうたわれた「すみれ草」です。「野のはな」の典故が、マタイ福音書6章28節の「山上の説教」にあることを知らないわけではありません。聖書学者は、「野のはな」は、早春のイスラエルを一面真っ赤に彩るアネモネか、同じキンポウゲ科のラナンキュラスだといえます。しかし、「野のはな」の印象はこの句の楚々としたすみれ草がふさわしい。私には、そう思われてなりません。

この聖書の箇所には、「思い悩むな」という小見出しが付けられています。たとえ、人には知られずとも、神の恵みの陽光の中で、たった一輪でも紫の花を咲かせるすみれ草のひたむきさ、けなげさ。「野のはな」に込められたイエスの思いは、この句にぴったりと重ねられるように思うのです。それは、群を頼んで全野を朱に染めるアネモネよりも、「思い悩むな」というイエスの勧めにふさわしいように思われます。

最近、社会派ジャーナリスト、桜井よしこさんの「何があっても大丈夫」という本を読みました。題名になったこの言葉は著者の母親の口癖で、「お母さんがあなた方を守るから、安心していらっしゃい」という言葉が、それに続いて語られたようです。

では、母親のその確信は、一体、どこからきたのでしょうか。「神さまは私たち皆を愛してくださってるの。だから、私たちは誰でもみんな、幸せになるようになっているの。どんな人も幸せになるために生まれてきたのよ」と、中学生の娘に語り聞かせた母親は、天性の純粋な信仰心を持っていた人のようです。そして、この幸薄い無学な母親の励ましが、思春期の桜井さんのころをしっかりと掴んで終生の支えになっているようです。

私たちは、幸い聖書に出会って、「そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された神（ヨハネ福音書3章16節）」を知っています。その神の子イエスが、「思い悩むな（Don't worry!）」と語り掛けられておられるのです。「野のはな」や「空のとり」を通して、神の愛を思い起こせと、私たちは呼び掛けられているのです。

「野のはな」会員の皆さんが、「思い悩むな（Don't worry!）」という神の励ましをしっかりと心に留め、精一杯、それぞれの花を咲かせてくださるようお願いしてやみません。



「野のはなに育つ」

学部長 中森千佳子

野のはな会員の皆様にはいかがお過ごしでしょうか。私こと、本年4月から生活環境学部長を仰せつかりました。弱輩ですが誠心誠意努める所存です。これまでもまして、ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い致します。

さて、2002年4月に家政学部から名称変更した生活環境学部は、この3月に第1回の卒業生を送り出しました。おかげさまで就職率は学部平均98.0%（学内データ）に達し、高い数値をあげることができました。また、今年度から、3学科ともにより高度な資格取得や専門をいかした進路に対応するカリキュラム改訂を実施しています。大学全入時代を間近に控え、時を移さず、さらなる魅力ある学部・学科への取り組みが求められています。

しかし、このような目まぐるしい状況の中で、常に確認したいことは、どのような人材を育てたいのかということです。最近の学生を見ていると、温室で育った大輪のバラをイメージします。もちろん、バラのすばらしさもありますが、私たちが育てたいのは果たして温室のバラなのでしょう。そう考える時、同窓会を「野のはな」と名づけた家政学部卒業生の姿が思い浮かびます。野の花に目をとめるゆとりとその良さを認めることができる審美眼、そして、大輪のバラと並んでも見劣りしない強さと知性を兼ね備えた女性です。家政学部の伝統を受け継いだ生活環境学部では、次代の「野のはな」を育成するために、温室ではない敢えて少々厳しい、しかしのびやかな環境を準備したいと願っています。

これからの時代に学部の存在意義を示し、他大学との差別化を図る方法は、専門をいかした社会的貢献であると考えます。家庭、地域、職場等での卒業生の評価が学部教育の評価に反映されるということです。学部として自信をもって送り出した卒業生との連携、支援、再入学をも視野に入れ、生涯を通して学生と大学が関わっていきけるシステムを構築したいと考えています。皆様の忌憚のないご意見をお待ちしています。